

開拓使最初の屯田兵 琴似兵村

序

北門の鎖鑰たる北海道の警備に関しては寛永以来本邦朝野の士により叫ばれたる問題である。これが施設に当りては幕府は深く鑑みる所あり、有為の吏員を派遣して取調べさせその状勢を知り、当時適当なる措置を施したが、特に移民政策として見るべき実績の顕著なるものが少ないことは遺憾である。

明治二年北海道開拓使が置かれて、時の開拓使次官黒田清隆の建議により、屯田兵制が実施せられることになり、それ以来本道の警備と移民問題が本格的に軌道にのり、初めて本道拓殖の方針が着々実施せられることになったことは、全く本道開拓使設置の際、賜わった、御詔書の余慶と拝察し奉るものである。

明治七年初めて琴似村に屯田兵屋が建設され、翌年五月初初の屯田兵が移住したのは、今より七十年の昔である。当時移住した初代の屯田兵は唯一人生残つて居るのみで、他は全部故人になつた様な次第で、今日昔の屯田兵のことなど尋ねても知る人とはなく、又記録の存するものもなく、この点甚だ遺憾に堪えない。

著者は琴似兵村に生れかつて第二屯田兵であつた。幼少の時より屯田兵の練兵演習を視、又永山司令官が幹部の將校を連れて兵屋検閲の時、門前に一行を迎えた当時の事ども記憶に存し、また農桑に親しむ兵員及家族の苦労の状態も知り、著者も自ら桑を摘み、桑園の手入を為し、又老母や弟妹と耕耘に従事し、現役時代より後備役満期当時の兵村の状態や、屯田の公有財産が第七師団司令部より地方庁へ引継がれる際の事情も知り、今日琴似兵村が町制を実施され、七十年間の兵村の変遷を想うと感慨無量なものがある。

著者は昔日の屯田兵村の状態や、屯田兵の世活総てが尚記憶し、又初代屯田兵について調べて置いた資料もあるので、これを纏めて見ようと余暇を偷んで筆を採つた。勿論多忙中に書いたもので、脱稿して見ると不備杜撰遺憾の点が多い。ただ事実をそのまま述べて見た兵村の沿革史に過ぎない。これを筐底に蔵するのも如何かと思われ、ここに上梓することになった。物資不足の今日これ容易ならざる次第で、辛うじて公に出ることが出来た。若しそれ看者の参考となる事があつたなら望外の幸である。

昭和十九年五月

琴似の里にて

著者識